

## 日中病理学分野の草の根交流：国際分子病理学シンポジウムと日中病理学シンポジウム

著者	蓮井 和久
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/16039">http://hdl.handle.net/10232/16039</a>

## 日中病理学分野の草の根交流

### 国際分子病理学シンポジウムと日中病理学シンポジウム

蓮井和久

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科感染防御学講座免疫学分野・講師  
日本病理学会学術評議員・会員番号：000379、  
国際分子病理学シンポジウム日本側連絡役)

シンポジウムは、一定のテーマを決めて、広く聴衆を集めて、公開討論等の形式で行われることが多い。一般には、基調講演とパネルディスカッションで構成されることが多い。国際分子病理学シンポジウムは国際的な参加者を募り分子病理学の分野のシンポジウムであり、日中病理学シンポジウムは日中で参加者を募り病理学の或るテーマに関するシンポジウムである。時々、その上部組織に関して聞かれることがあるが、基本的には独立した企画であるが、国際分子病理学シンポジウムは日本病理学会の関連企画となっており、日中病理学シンポジウムは、蓮井和久（鹿児島大学）と賈心善（中国医科大学）の海外学術共同研究の下で実施されている。

この日中病理学分野の草の根交流は、学術面での交流は、そのプログラムが重要な要素である。国際分子病理学シンポジウムは抄録集が作製されている。一方、日中病理学シンポジウムは、その抄録集を作らずに、プログラムのみを記録し、その学術的成果は、蓮井和久（鹿児島大学）と賈心善（中国医科大学）の海外学術共同研究の成果として、論文発表されたり、その成果報告書等に記録されている。それ以外の人的交流は、相互の病理学分野の理解を深め、さらに、文化交流の面はそれぞれの人々の国、歴史、自然、そして、人々自体を理解するのに重要な要素と考えることから、この記録を残すものとした。

日本側の参加者の中には、既に、故人となっておられる方々もあり、時折に、思い出して頂き、日中病理学分野の交流の歴史を振り返ることも、時に重要と思われる。

#### 1) 国際分子病理学シンポジウム

国際分子病理学シンポジウムは、渡辺慶一（東海大学）が中国での学会の帰路で賈心善（中国医科大学）に病理学分野での日中の交流の場が欲しいと言い、賈心善は鹿児島大学に留学し佐藤榮一（鹿児島大学）とその夢の実現を企図したことに始まる。

第1回は、名誉会長に渡辺慶一（東海大学）と藤衛平（中国医科大）、会長に佐藤榮一（鹿児島大学）と賈心善（中国医科大学）、事務局長に蓮井和久（鹿児島大学）と韓立晨（中国医科大学）で、日中医学協会と中国医科大学後援で、公用語を英語とし、1998年8月26～29日に中国敦煌で開催され、約70名の参加を得た。Scientific committeeは、日本側が渡辺慶一、秦順一（慶応大学）、名倉宏（東北大学）、高橋潔（熊本大学）、菊池昌弘（福岡大学）、佐藤榮一であり、中国側が劉彦方（第4軍医大学）、黄高昇（第4軍医大学）、司履生（西安医科大学）、張月娥（上海医科大学）、賈心善であった。敦煌での初の学術会議であり、このシンポジウム開催の背景には、中国人の国内旅行熱、日本人のシルクロード熱、日中相互の文化交流の願望があった。

第2回は、会長は名倉宏と賈心善で、2001年8月17～24日に成都（四川大学）で開催され、約50名の参加であった。日本側は世話人制度と連絡役（蓮井和久）を導入した。世話人は名倉宏、朔敬（新潟大学）、阿部正文（福島県立医科大学）、秦順一、長村義之（東海大学）、大井章史（山梨医科大学）、社本幹博（藤田保健衛生大学）、堤寛（藤田保健衛生大学）、井内康輝（広島大学）、菊池昌弘、竹屋元裕（熊本大学）で、文化交流の世話人は佐藤榮一であった。

第3回は、会長は井内康輝と賈心善、中国側副会長はJin Cui（昆明医学院）で、2004年8月14～21日に昆明で開催され、参加は約50名で、中国の若手研究者のポスター発表も行われた。

第4回は、会長は蓮井和久と賈心善で、中国医科大と鹿児島大の共催で、2006年8月5日～12日に中国ウルムチで開催され、約40名の参加であり、日高薫（国立歴史民族博物館）は日本蒔絵の中国への逆輸出の文化講演を行った。この会で、中国の経済的発展と外国旅行熱を背景に、鹿児島での開催が決まり、名倉宏の提案で日本病理学会関連シンポジウムとしての承認を求めることになった。

第5回は、会長は蓮井和久と賈心善で、中国医科大と鹿児島大と日本病理学会の後援で、2007年7月30日～8月2日に鹿児島で開催され、参加は約70名であり、野添良隆（中央ビル野添歯科）の徐福伝説の文化講演を行った。

第6回は、会長は蓮井和久と王恩華（中国医科大学）、副会長に、賈心善と格日力（西海大学）で、西寧で行われた。2010年8月20-21日に西寧で開催され、36名程の参加者を見た。

現在、国際分子病理学シンポジウムは、病理学関係者の草の根交流と日中の文化交流を目指す場としての会議を企画実施し、次なる日中の病理学分野の親密な交流の礎になることを希望している。

## 2) 日中病理学シンポジウム

日中病理学シンポジウム（第1回）は、2003年の蓮井和久が代表研究者である日本学術振興会科学研究費補助金の基盤研究(B)海外の研究打ち合わせで、2003年10月2～9日の研究打ち合わせの中の2003年10月7日の午後に、中国医科大学の基礎医学院の会議室（旧満州医科大学の教授会室）で、50名余りの病理学関係者と中国医科大学の日本語クラス（日本の医学教育に準じて、日本語で医学を学ぶ医学部6年コース）の学生の参加で行われた。青笹克之（大阪大学）の鼻NK/T細胞リンパ腫、中川正法（京都府立医科大学）の神経疾患の分子病理学、川田久（鹿児島大学）の皮膚の悪性リンパ腫、蓮井和久の超高感度免疫組織化学、中国での研究を進めている段階の一つのまとめを賈心善教授の大学院学生の何先生の講演があった。

第2回日中病理学シンポジウムは、2007年の研究打ち合わせに合わせて、研究成果の報告と今後の研究フィールドでのEBV関連疾患の発生状況の把握を目的に、中国東北地方のハルピン医科大学セミナー（2007.9.3、ハルピン）、吉林大学医学部セミナー（2007.9.4、長春）、中国医科大学で第2回日中病理学シンポジウム（2007.9.7、瀋陽）が実施された。セミナーでは、蓮井和久の”中国東北地方の鼻NK/T細胞性リンパ腫”、岡村隆行（琉球大学小児科）の”慢性活動性EBV感染症”、佐藤榮一の”慢性EBV感染の生検例”、奥村晃久（鹿児島生協病院病理）の”慢性活動性EBV感染症の解剖例”の講演があり、シンポジウムでは、蓮井和久の”中国東北地方の鼻NK/T細胞性リンパ腫”、榮鶴義人（鹿児島大学）の”ペルーでのEBV関連胃癌のEBV種の検討”、岡村隆行の”慢性活動性EBV感染症”、佐藤榮一の慢性EBV感染の生検例”形質細胞腫治療のための幹細胞移植後に起こったEBV関連出血性潰瘍性小腸炎”、奥村晃久の”慢性活動性EBV感染症の解剖例”の講演が行われた。

第3回日中病理学シンポジウムは、2009年研究打ち合わせと共に、山東大学医学部で2009.8.2～2309.8.9の研究打ち合わせの中で、Motohiro Takeya and Yoshihiro Komohara (Department of Cell Pathology, Graduate School of Medical Sciences, Kumamoto University) M2 anti-inflammatory macrophage phenotype and tumor microenvironment、Taku Nagai, Masashi Tanaka, Kazuhisa Hasui, Toshihide Nishimura, and Takami Matsuyama (Department of Immunology, Kagoshima University Graduate School of Medical and Dental Sciences.) Efficacy of recombinant immunotoxin against folate-receptor beta for tumor and chronic inflammatory diseases、Kazuhisa Hasui, Wang Jia, Xinsan Jia, Takami Matsuyama and Yoshito Eizuru (Division of Persistent & Oncogenic Viruses, Kagoshima University Graduate School of Medical and dental Sciences, and Department of Pathology, China Medical University.) Nasal NK/T-cell lymphoma in Northeast China、Zhang Xiaofang (Department of

Pathology, Shandong University School of Medicine.) Co-suppression of MDR1 (multidrug resistance 1) and GCS (glucosylceramide synthase) restores sensitivity to multidrug resistance breast cancer cells by RNA interference (RNAi)の講演が行われた。

日中病理学シンポジウムは、今後も、賈心善教授との海外学術共同研究の進行に伴い、研究成果公表の為のセミナーと共に、実施して行く予定である。

蓮井和久 Column 日中病理学分野の草の根交流 11章 折々の記録 日本病理学会 100周年記念誌 2011;pp. 231.

国際分子病理学シンポジウムは、渡辺慶一（東海大）が第4回日中合同組織細胞化学セミナー（1996年9月11～14日、重慶）の帰路、賈心善（中国医科大）に病理学分野での日中の交流の場をもうける事の必要性を述べた事に始まる。賈心善は鹿児島大学に留学し佐藤榮一（鹿児島大）とその夢の実現のための活動を開始した。第1回は、名誉会長に渡辺慶一と藤衛平（中国医科大）、会長に佐藤榮一と賈心善、事務局長に蓮井和久（鹿児島大）と韓立晨（中国医科大）で、日中医学協会と中国医科大後援で、公用語を英語とし、1998年8月26～29日に中国敦煌で開催され、約70名の参加を得た。Scientific committeeは、日本側が渡辺慶一、秦順一（慶応大）、名倉宏（東北大）、高橋潔（熊本大）、菊池昌弘（福岡大）、佐藤榮一であり、中国側が劉彦方（第4軍医大）、黄高昇（第4軍医大）、司履生（西安医科大）、張月娥（上海医科大）、賈心善であった。敦煌での初の学術会議であり、このシンポジウム開催の背景には、中国人の国内旅行熱、日本人のシルクロード熱、日中相互の文化交流の願望があった。

第2回は、会長は名倉宏と賈心善で、2001年8月17～24日に成都（四川大）で開催され、約50名の参加であった。日本側は10名の世話人制度と連絡役（蓮井和久）を導入した。第3回の会長は井内康輝と賈心善が務め、中国側副会長のJin Cui（昆明医学院）の尽力により、2004年8月14～21日に昆明で開催され、参加は約50名であった。中国の若手研究者のポスター発表も行われた。第4回は、会長は蓮井和久と賈心善で、中国医科大と鹿児島大の共催で、2006年8月5日～12日に中国ウルムチで開催され、約40名の参加を得た。日高薫（国立歴史民族博物館）は日本蒔絵の中国への逆輸出についての文化講演を行った。第5回は、日本病理学会関連シンポジウムとして、2007年7月30日～8月2日に鹿児島で開催され、中国側の27名を含め、約70名の参加者であった。次回は2010年8月に中国西寧で第7回の開催を予定している。

鹿児島大学は中国医科大学（中国遼寧省瀋陽市）と1993年9月13日から学部間、1998年4月28日から大学間交流協定を締結して、活発な交流を重ねている。病理学分野では学術振興会基盤研究(B)海外(代表 蓮井和久:1998～2010)の助成のもと、中国東北地方の腫瘍性疾患の共同調査を継続している。